別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

2023年　5月　1日

氏名　門間　智子　印

研究分野	研究内容のキーワード
看護学、社会福祉学	小児看護学、こども福祉、障害児（者）福祉

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1)大学院教育 (1) 専門看護師として実践した臨床事例を活用した教育	平成26年度 平成27年度 平成29年度 平成30年度	茨城県立医療大学大学院博士前期課程小児看護学専攻3名、科目等履修生2名に対し、自身が専門看護師の役割を実践した事例を加工し、教育の題材にした。「小児看護マネジメント論」においては小児看護CNSの役割、「小児看護サポートシステム論」においては子どもと家族をとりまく社会資源とその活用、「小児看護援助演習」においては、ストレスコーピング理論等の活用について、専門看護師が介入する複雑で解決困難な事例を示し、事例の分析を学生と共に行い、学びを深めた。
(2) 小児看護専門看護師教育における臨地実習と演習科目を有機的に連動させた教育	平成26年度 平成27年度	茨城県立医療大学大学院「小児看護応用演習」において、小児看護CNSコースの学生3名が履修した。臨地実習の実習指導者も担当しており、本科目の内容はその実習と有機的に連動させた。実習においてCNSの役割を実践できたあるいは役割を意識したが難しかった事例を本科目の題材とすることを実習前に学生に説明し、実習に臨んでもらった。学生が持ってきた事例を題材に事例のアセスメントや専門看護師としての介入について討議し、事例の課題、学生の課題を学生と一緒に整理した。
(3)専門看護師認定審査（日本看護協会）に向けたCNSコース修了生に対する個別指導	平成24年度～令和１年度	茨城県立医療大学大学院小児看護CNSコース修了生の指導教員からの依頼または修了生からの個人的な相談により、これまでに3名の支援を行った。主に認定試験に必要な活動報告書についての助言、認定試験で不合格だった修了生に対しては事例問題を修了生自身に作成させ、一緒に検討した。活動報告書についても事例問題についても、専門看護師としての役割が適切に示され、実施できていたか、課題の背景から分析、介入、評価までに一貫性があるかなどの視点で指導してきた。かかわった3名全員が専門看護師に合格し、それぞれの施設で活躍している。
2)学部教育等 (1)フィジカルアセスメント教育の工夫	令和1年度～令和4年度	常磐大学看護学部2年生90名（令和1年）を対象に科目名「ヘルスアセスメントⅠ」における「頭頚部・口腔のフィジカルアセスメント」を担当した。基礎的知識の理解を前提に、①異常の発見のために正常を理解しておくことの重要性、②診察を受ける対象者への配慮を体験から理解できるよう、学生同士で頚部リンパ節、甲状腺、口腔内の観察を行う演習を行った。演習にあたっては、①②の目的に沿った演習方法、アセスメント用紙、評価用紙を含めた演習書を作成し、活用した。
(2)看護技術習得のためのシミュレーション教育	令和2年度～現在	常磐大学看護学部3年生85名を対象に科目名「生涯発達における援助技術」における「小児の身体計測」「小児の輸液管理」を担当した。基礎的知識について講義したのち、実際に身体計測や輸液管理で用いる物品を扱いながら、モデル人形や模擬血管を装着したモデル人形を対象に実際に計測や輸液管理を体験学習させた。教育効果を図るために、評価用紙、アセスメント用紙（身体計測）、観察チェックリスト・点滴指示書（輸液管理）を含めた演習書を作成し、活用した。

(3)PBLを用いたチュートリアル教育	令和1年度～現在	常磐大学看護学部「情報と看護展開Ⅱ」「情報と看護展開Ⅲ」「地域・在宅看護援助Ⅱ」（いずれも共同形式科目）において、PBLを用いたチュートリアル教育を行った。主にチューターの役割を担い、学生の自発性、関心、能動性を引き出せるよう、学生が課題に没頭できるようサポートした。個々の学生の学修態度を見ながら、良いところを引き出し、混乱している様子が見られる時にはヒントを与え、グループ学習の効果を上げるよう努めた。
(4)視聴覚教材の作成と教育実践		
①学部教育	平成29年度～令和3年度	千葉科学大学看護学部2年生を対象に小児看護学「重症心身障害児（以下、重症児）への看護の実際」において、重症児の家族から承諾を得て提供いただいた多くの画像から作成した視聴覚教材を用いて講義を行った。視聴覚教材を用いた意図は重症児の病期や療養の場が多岐にわたり、その時期や療養場所での重症児の姿を想起しやすくするためであった。視聴覚教材を示す際には学生に絶対に写真撮影をしてはいけないことを約束させ、「個人情報保護」についても学ばせた。
②認定看護師養成課程	平成19年度～平成24年度	茨城県立医療大学摂食・嚥下認定看護師教育課程「摂食・嚥下障害援助論」において、よくみられる小児の摂食・嚥下障害の事例について、家族の承諾を得て、自身が摂食指導の実践中に撮影している動画から作成した視聴覚教材を用いて、どのようにアセスメントしケア計画を立てるか、学生と討議し、解説を行った。毎年15名前後の学生を対象としたが、摂食・嚥下障害のある子どもにかかわったことがない学生が大半であり、よくみられる症状を視聴覚教材で示すことで理解が深まった。
(5)小児看護学実習における多様な施設での経験を統合する工夫	令和2年度～現在	常磐大学看護学部3年生「小児看護学実習」において、個々の学生の習熟度に合わせ、臨床実習指導者と適宜調整をしながら実習指導を進めた。中間と施設実習の最終日には臨床実習指導者にも参加してもらい、臨床現場の視点から指導を仰いだ。実習最終日は同時期に異なる小児施設で実習した学生と合流し、お互いの施設特徴、特徴的な事例とその看護についてカンファレンスを行い、小児看護の対象やケアの特殊性の理解をより深めるよう工夫した。学生からは身近で安心感を得て実習に臨めた、最終日に複数の施設が合流することで学びが深まった、などの肯定的な評価を得た。
(6)covid-19感染拡大における演習および実習の工夫		
①演習	令和2年度～現在	常磐大学看護学部2年生93名（令和2年）を対象に科目名「ヘルスアセスメントⅠ」における「頭頚部・口腔のフィジカルアセスメント」を担当した。感染予防の観点から令和1年に実施した学生同士の観察を控え、鏡を持参させ、自席で自分の甲状腺や頚部リンパ節を触診し確認する演習を行った。また、リンパ節腫脹に気付いて受診をした事例を提示し、グループごとに問診場面のロールプレイをさせて、問診での情報の取り方、問診から得られる情報の重要性についての理解を促した。正常な状態を知ってもらうために学生同士の観察の代わりに講義の中で教科書や参考図書に掲載されている口腔内の画像を数多く閲覧させるよう工夫した。

②小児看護学実習	令和2年度～現在	常磐大学看護学部「小児看護学実習」において、臨地実習に行けなかった実習生計31名に実施した。学生が行く予定であった実習施設に入院している子どもの特徴を踏まえた事例を複数作成し、紙上事例として提示した。実習期間中は毎朝オンラインで臨床指導者役に扮した教員から情報提供（前日午後から朝までの様子）を行い、学生はその日の行動計画を発表した。学生はeラーニングシステムを使って教員とのやりとりを毎日行い、紙上事例を展開した。感染対策を徹底して登校してもらい、1週目の最終日には学生個人が抽出した看護課題の発表を、2週目には援助計画の中からシミュレーター使用、ロールプレイなどの方法で1人ずつ発表し、他の学生の学びも深めた。学生の看護展開の状況、発表する計画内容によって日々提供する申し送りの情報を変更し、より臨地実習に近づける工夫をした。臨地実習では経験できない技術をシミュレーターを使って実施できる点、臨地実習では学生に担当させることが難しい事例を示し、学修できる点などは学内実習の利点であった。
2　作成した教科書，教材 1)資料集「重度な障害をもつ子どもの健康観察とケアについて」	平成16年10月	茨城県立医療大学公開講座「重度な障害をもつ子どもの医療的ケア・看護の工夫」で配布した資料集である。重度な障害をもつ子どもに生じやすい症状とケアのポイントをQ&Aで示した。さらに参考となる図書の一覧を掲載した。
2)小児看護学実習実習要項	令和1年度～現在	常磐大学看護学部「小児看護学実習」で使用する。学生の実習が円滑に進むために、実習目的、実習目標、実習スケジュール、実習施設、実習方法、留意点、健康管理、連絡先、提出物、記録様式から構成される実習要項を作成した。実習要項をもとに実習前にオリエンテーションを行うことで、学生は実習の具体的な展開が想像でき、実習を進めることができた。記録ももれなく提出できた。実習要項は毎年内容を更新し、作成する。
3)小児看護学実習学内実習用事例集	令和2年度～現在	常磐大学看護学部「小児看護学実習」において、学内実習に切り替わった際に使用する紙上事例を複数作成し、事例集とした。実習施設に特徴的な疾患で重症度や発達段階、家族背景など架空の設定を作り、実習期間（2週間）分の毎日の情報も入れており、より臨地実習に近い形で学内実習を展開できるよう工夫している。
3　教育上の能力に関する大学等の評価	平成29年8月	大学設置・学校法人審議会における専任教員資格審査において、常磐大学看護学部講師として、「ヘルスアセスメントⅠ」「小児看護援助」「情報と看護展開Ⅱ」「生涯発達における援助技術」「看護展開導入演習」「小児看護学実習」「地域・在宅看護援助Ⅱ」「情報と看護展開Ⅲ」「地域包括ケア演習」「看護課題の探究」「看護展開統合演習」「統合実習」について「可」と判定された。
	令和3年10月	大学設置・学校法人審議会における専任教員資格審査において、常磐大学大学院看護学研究科看護学専攻修士課程　専任講師として、「看護倫理とコンサルテーション論」「母子看護学特論」「小児看護学演習」「小児専門看護学特論Ⅰ」「小児専門看護学特論Ⅱ」「小児専門看護学特論Ⅲ」「小児専門看護学特論Ⅳ」「小児専門看護学特論Ⅴ」「小児専門看護学演習Ⅰ」「小児専門看護学演習Ⅱ」「小児専門看護学演習Ⅲ」「母子看護学実践課題研究」「小児専門看護プロジェクト」「高度実践実習（リーダーシップ）」「小児専門看護学実習Ⅰ」「小児専門看護学実習Ⅱ」「小児専門看護学実習Ⅲ」について「可」と判定された。

4　専門看護師としての実務の経験を有する者についての特記事項 1)院内（土浦協同病院）での活動 (1)教育 ①大学院生の病院実習における指導 a.CNSコース学生	平成17年度 平成18年度 平成26年度 平成27年度	茨城県立医療大学大学院CNSコース生5名の実習指導を行った。学生が作成した実習計画書を当該施設に合わせて修正し、学生と共有してから実習を受け入れた。専門看護師の役割を理解してもらうために、自身の専門看護師の活動見学から開始し、その後の（主に）病棟において、学生自身が主体的に役割実習をできるよう、十分なオリエンテーションと関係各所への事前連絡、調整を行った。基本的には相談役として機能し、必要に応じて関係各所への相談や報告、調整を行った。実習中には複数回カンファレンスを行い、事例や組織の分析、そこから出た課題、課題に対する介入、評価などについて討議した。
b.修士課程学生	平成24年度 平成25年度	筑波大学大学院修士課程学生1名、沖縄県立看護大学大学院修士課程学生2名、計3名の実習指導に携わった。個々の課題やニーズを事前に共有し、関係各所への連絡・調整を行い、自身の専門看護師活動の見学や希望する病棟の見学実習、院内における教育活動、委員会活動などの見学をしてもらい、感想や学びを共有するようにした。
②病院看護職者の看護倫理研修	平成17年度～ 平成25年度	土浦協同病院看護部の教育目標にもとづき、「看護倫理」に関する研修を企画・実施した。講師として倫理原則、倫理的課題の分析方法などの講義を行い、倫理的課題についてのグループ討議の運営とファシリテーターを行った。毎年、研修企画と実施に携わったが、特に平成22年には看護倫理委員を中心としたファシリテーターがそれぞれの部署に出向いて各部署から出た倫理的課題について部署内で倫理カンファレンスを行うものであり、現場の倫理的課題をタイムリーに現場の看護職が考えるきっかけづくりになった。以後の研修運営にも役立っている。
③病院における看護研究支援	平成18年度～ 平成30年度	土浦協同病院において看護研究支援に携わった。クリニカルラダー別の研究に関する研修を企画・実施した。研究に関する講義も行った。平成27年度には全看護職員を対象に研究活動に対する思いについてアンケート調査を行い、そのアンケート結果をもとに研修プログラムを改訂した。また、年間約60件発表される看護部の学会発表に向けた研究計画書、抄録、スライド、ポスター作成などの相談を個別に毎年対応していた。看護部職員の学会発表前には必ず予演会を行い、発表者の準備を支援した。
(2)高度実践の経験（土浦協同病院） ①小児摂食嚥下ケアチーム活動	平成20年度～ 平成30年度	急性期病院において、摂食嚥下障害のある子どもへのケアの優先度は低く、介入が不十分なまま適切なタイミングでのケア提供ができていない現状があった。そこで他職種に声をかけ、チームを結成した。非公式なチームから院内の正式な委員会になるよう管理部門と交渉し、在職中はチームの副委員長を努めた。チームではスタッフからの相談対応および提案、事例検討、勉強会などの活動を行った。 現職に異動してからは、定例会議のみ参加し、小児看護外来でみた摂食指導事例について報告し、情報共有している。

②在宅医療委員会小児実務者会議活動	平成24年度～平成30年度	障害のある子どもが在宅療養移行から維持する過程までには院内の複数の部署が関与している。組織横断的に活動する中で、障害のある子どもが移動していくNICU、小児科病棟、小児科外来、訪問看護ステーションの各看護師の連携の悪さとコミュニケーション不足に気付き、部署間の良好な関係作りや共通マニュアルの作成に着手した。その後、他職種連携の必要性を感じ、医師やソーシャルワーカーに相談し、院内の正式な委員会として活動を開始した。委員会ではマニュアル改訂、診療報酬と関連させた物品支給、近隣の社会資源の情報収集、長期入院児の検討、主介護者の養育負担軽減のための支援などのワーキンググループを作り、それぞれ活動し、副委員長としてその活動の取りまとめの一部を行った。 現職に異動してからは、可能な範囲で定例会議に参加し、情報共有している。
③専門看護外来（小児看護外来）開設	平成24年9月～平成25年2月	慢性疾患や障がいにより在宅療養をしている小児の場合、身体面に焦点をあてた医師の外来診療のみでなく、成長発達を含めた生活面の支援が必要と考え、小児看護外来設立を考えた。開設するために、他の小児看護専門看護師が行っている専門看護外来の情報収集や文献検討、日本看護協会主催の研修「専門性を活かした看護外来の開設をめざして～実践から学ぶ外来運営方法と課題～」の受講をし、開設に必要な手順や手続きを整え、企画書を作成して小児科部長、看護部長、外来看護師長、病院長の順に説明に行き、開設の許可を得た。必要な対象者に利用してもらうために、開設前に関連部署に案内を掲示すると共に小児科・新生児科・小児外科医全員に外来の目的・内容・予約方法等を説明し協力を依頼した。
④専門看護外来（小児看護外来）の運営	平成25年2月～現在	主に在宅療養児の支援、摂食嚥下障害のある子どもへの摂食指導、育児相談などを行っている。週1回の頻度で1名につき30分～1時間以内で支援できるよう設定した。医師からの依頼が多く、最初の依頼目的は摂食指導が多いが、子どもと家族に関わっていると、摂食嚥下障害を含めた在宅療養上の課題を抱えていることに気付き、あらゆる課題に対して支援するようにし、必要時、関係職種につなげている。 現職に異動してからは、非常勤職員として、月に2回程度の頻度で継続している。
⑤重症心身障害児・者とその家族への対応に困難を感じた職員へのコンサルテーションおよびチーム作り	平成27年～平成30年	20歳代まで他院の小児科だけで診療を受けていた重症心身障害児（以下、重症児）が治療目的で成人病棟に入院した際に急変により人工呼吸器装着となった事例があった。成人病棟の看護職から家族との信頼関係が築けず、家族の想いを聞けない、かかわり方が難しいとの相談を受け、家族と面談をしたのち、相談者にフィードバックした。重症児・者の生命予後がよくなるにつれ、今後も同じように20歳を超えた重症児・者が小児科を経由せずに他科を受診したり入院することは予測される。重症児・者とその家族が少しでも安心して入院治療を受けられるよう、更に医療者も安心して彼らに関わることができるよう、多職種によるコンサルテーションチームを作り、相談を受ける体制を作った。その後、チームとして病院全体を対象とした「重症心身障害児・者の家族」と題した研修会の開催や複数の相談事例に対応した。
2)院外での活動		
(1)茨城県看護教員連絡会小児看護学研修会講師	平成18年10月	県内の看護学校教員を対象に「小児看護専門看護師の役割と活動」について講演を行った。当時は専門看護師制度についての認知度も低かったため、どのような役割を担うのか、事例への実践を紹介しながら説明した。
(2)小児看護分野スキルアップセミナー講師（日本専門看護師協議会主催）	平成21年1月	「発達障害の子どもと家族への支援」をメインテーマに開催したセミナーの中で、「医療ニーズが高い子どもと家族の理解と支援の現状」について講演を行った。

(3)『たんの吸引研修会』講師	平成21年3月	吸引を行うヘルパー事業所を増やすことを目的に、障害児の親の会と牛久市社会福祉協議会主催で行われた吸引研修会において、講義と実技指導を行った。
(4)茨城県教育委員会医療的ケア支援事業に係る一般研修会講師	平成21年4月	特別支援学校の教員、非常勤嘱託看護職員を対象に行われる研修会の中で、「健康状態の観察方法」について講義を行った。ふだんの様子を知ること、家族との情報共有が重要であること、一方で家族が観察したことだけから判断するのでなく、自分で観察することが重要であることも伝えた。
(5)医療的ケア教員研修会　実技「痰の吸引、経管栄養、導尿の実際」講師	平成24年8月	特別支援学校の教員、非常勤嘱託看護職員を対象に医療的ケアについての実技指導を行った。吸引、経管栄養、吸引ができるモデル人形を使って実際に経験してもらうようにした。
(6)平成24年度茨城県看護協会教育研修　小児救急看護、小児看護に必要な看護倫理　講師	平成24年10月	県内看護協会員の看護職約100名を対象に小児看護に必要な看護倫理に関する講義および事例検討を行った。事前に参加者個々が感じている倫理的課題を提出してもらい、同じような課題を感じている参加者同士でグループをくみ、倫理的課題についてディスカッションしてもらい、全体発表し、意見交換した。
(7)2014年度講演会茨城キリスト教大学看護学部　小児看護専門看護師の役割と活動の実際　講師	平成26年7月	学生および大学教員を対象に小児看護専門看護師の役割と活動の実際について講演を行った。特に小児看護学実習に行っている学生へのヒントになるような内容を含めてほしいとの要望を受け、摂食嚥下障害のある子どもの事例の展開など具体的な内容とした。
(8)小児科クリニックにおける育児相談	平成27年4月～	茨城県つくば市内のクリニックにおいて、1回/2カ月の頻度で当該クリニックの受診者で子育て上の悩みを抱えている母親などを対象に育児相談を行っている。必要に応じて、発達スクリーニングテストを実施し、専門的立場から支援している。
(9)第1回家庭看護力醸成セミナー　シンポジスト	平成27年11月	日本小児科医会主催のセミナーで、家庭での看護力を向上させるために多職種によるシンポジウムおよび討論を行った。「家庭看護力醸成のために看護職ができること」のテーマで講演した。セミナーの対象が専門職および親であったため、子どもが成長していく過程では多くの場で看護職がかかわっており、いつでも相談できる準備があるので、気軽に相談してほしいことをアピールした。
(10) つくば国際大学小児看護学臨時講師	平成28年11月	「NICU児の退院支援/在宅障がい児への継続支援」について、看護学部2年生80名を対象に講義を行った。障害のある子どもが退院し、家庭で過ごすために必要な支援3点について、3事例を通して解説した。
(11)平成29年度訪問看護支援事業　訪問看護専門分野研修（小児・重症心身障がい児）　講師	平成29年10月	茨城県看護協会事業の一つで、『在宅ケアを必要とする小児の特徴、社会福祉制度の活用、小児・重症心身障がい児の在宅移行の事例』について講義を行った。
(12)平成30年度訪問看護事業　訪問看護専門分野研修（小児・重症心身障がい児）　講師	平成30年8月	茨城県看護協会事業の一つで、『社会資源の活用およびネットワークづくり』について講義を行った。
(13)令和元年度総合病院土浦協同病院育児支援協議会主催　在宅療養をするこどもためのケア研修会　講師	令和元年8月	「障がい児のケアのこつ」をテーマに、医師、看護師、人工呼吸器業者が講義を行った。看護師として、「各ライフステージに合わせた支援」について講義した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		

4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)大学院生（CNSコース、修士課程）の病院実習における指導（土浦協同病院在職時）	平成17年～平成30年3月	茨城県立医療大学、筑波大学、沖縄県立看護大学の実習指導に携わった。原則として、一度に対応する実習生は1名であった。実習前に実習目的や方法について実習生と話し合って計画を共有した。CNSコースの実習生は専門看護師の役割への示唆を得てもらうために、最初に自身の専門看護師の活動を見学してもらい、その活動の意図や内容について討議をした。その後の（主に）病棟における集中的な実習においては、学生自身があらゆることをコーディネートできるよう十分なオリエンテーションと関係各所への事前連絡や調整を行った。実習中は学生が主体的に実習できるよう、相談・調整役として機能している。実習の途中と最後にカンファレンスを行い、事例や組織の分析、そこから出た課題、課題に対する介入、評価などについて討議している。CNSコース以外の学生は個々の課題を事前に共有したうえで、専門看護師活動と院内において特徴的な活動を中心に見学してもらい、感想や学びを共有するようにした。
2)小児看護外来開設（土浦協同病院）	平成25年2月～継続	慢性疾患や障がいにより在宅療養をしている小児の場合、身体面に焦点をあてた医師の外来診療のみでなく、成長発達を含めた生活面の支援が必要と考え、小児看護外来を設立した。主に在宅療養児の支援、摂食・嚥下障害のある子どもへの摂食指導、育児相談などを行っている。現職に異動してからも、非常勤職員として、月に2回程度の頻度で継続している。
3)小児摂食嚥下ケアチーム活動（土浦協同病院）	平成20年～継続	急性期病院である病院において、摂食嚥下障害のある子どもへのケアの優先度は低く、介入が不十分なまま適切なタイミングでのケア提供ができていない現状があった。そこで中心となって多職種に声をかけ、チームを結成した。チームではスタッフからの相談の吸い上げ、事例検討、スタッフへの提案、勉強会などの活動を行っている。現職に異動してからは、定例会議のみ参加し、小児看護外来でみた摂食指導事例について報告し、情報共有している。
4）在宅医療委員会小児実務者会議活動（土浦協同病院）	平成24年～継続	障害のある子どもが在宅療養移行から維持する過程までには院内の複数の部署が関与している。最初は入院部署、外来、訪問看護ステーションの各看護師と部署間の連携や共通マニュアルの作成に着手した。その後、他職種連携の必要性を感じ、医師やソーシャルワーカーに相談し、院内の正式な委員会として活動を開始した。現在はマニュアル改訂、診療報酬と関連させた物品支給、近隣の社会資源の情報収集、長期入院児の検討、主介護者の養育負担軽減のための支援などのワーキンググループを作り、それぞれ活動し、副委員長としてその活動の取りまとめの一部を行っていた。現職に異動してからは、可能な範囲で定例会議に参加し、情報共有している。
5)看護倫理；院内研修講師（土浦協同病院在職時	平成17年～平成25年	院内看護部教育委員会、看護倫理委員会の研修プログラムにもとづき、倫理の原則、ジレンマへの対応などの講義、グループ討議。レベル別に実施するため、年3～4回実施した。
6)看護研究；院内研修および研究支援（土浦協同病院在職時）	平成18年～平成30年	現任者の継続研修として看護研究研修に携わった。クリニカルラダー別の研修プログラムをたて、その一部は講師もした。平成27年度には全看護職員を対象に研究活動に対する思いについてアンケート調査を行い、そのアンケート結果をもとに研修プログラムを改訂した。また、年間約60件発表される看護部の学会発表に向けた研究計画書、抄録、スライド、ポスター作成などの相談を個別に対応していた。予演会においては、想定質問を行い、発表者の準備を支援していた。
7)茨城県看護教員連絡会小児看護学研修会講師	平成18年10月	県内の看護学校教員を対象に「小児看護専門看護師の役割と活動」について講演を行った。

8)小児看護分野スキルアップセミナー講師（日本専門看護師協議会主催）	平成21年1月	「発達障害の子どもと家族への支援」をメインテーマに開催したセミナーの中で、「医療ニーズが高い子どもと家族の理解と支援の現状」について講演を行った。
9)『たんの吸引研修会』講師	平成21年3月	吸引を行うヘルパー事業所を増やすことを目的に、障害児の親の会と某市社会福祉協議会主催で行われた吸引研修会において、講義と実技指導を行った。
10)茨城県教育委員会医療的ケア支援事業に係る一般研修会講師	平成21年4月	特別支援学校の教員、非常勤嘱託看護職員を対象に行われる研修会の中で、「健康状態の観察方法」について講義を行った。
11)医療的ケア教員研修会　実技「痰の吸引、経管栄養、導尿の実際」講師	平成24年8月	特別支援学校の教員、非常勤嘱託看護職員を対象に医療的ケアについての実技指導を行った。
12）平成24年度茨城県看護協会教育研修　小児救急看護、小児看護に必要な看護倫理　講師	平成24年10月	県内看護協会員の看護職約100名を対象に小児看護に必要な看護倫理に関する講義および事例検討を行った。
13）2014年度講演会茨城キリスト教大学看護学部　小児看護専門看護師の役割と活動の実際　講師	平成26年7月	学生および大学教員を対象に小児看護専門看護師の役割と活動の実際について講演を行った。
14）第1回家庭看護力醸成セミナー　シンポジスト	平成27年11月	日本小児科医会主催のセミナーで、家庭での看護力を向上させるために多職種によるシンポジウムおよび討論を行った。「家庭看護力醸成のために看護職ができること」のテーマで講演した。
15)平成29年度訪問看護支援事業　訪問看護専門分野研修（小児・重症心身障がい児）　講師	平成29年10月	茨城県看護協会事業の一つで、『在宅ケアを必要とする小児の特徴、社会福祉制度の活用、小児・重症心身障がい児の在宅移行の事例』について講義を行った。
16)平成30年度訪問看護事業　訪問看護専門分野研修（小児・重症心身障がい児）　講師	平成30年8月	茨城県看護協会事業の一つで、『社会資源の活用およびネットワークづくり』について講義を行った。
17）クリニックにおける育児相談	2015年～継続	１クリニックで取り組んでいる育児相談事業グループのメンバーとして、交代で育児相談を行っている。対象は子育て上の悩みを相談にこられ、専門職の立場から支援している。
18）日本小児看護学会2021年度スキルアップ研修【医療依存度の高い子どもと家族のコース】集合研修ファシリテーター	2021年9月	日本小児看護学会で開催されている小児看護スキルアップ研修の事例検討グループワークにファシリテーターとして参加した。
19)第17回北関東摂食嚥下リハビリテーション研究会　講師	2022/8/1(オンライン開催)	「発達期の『食べる力』を育むために」をテーマに開催された研究会において、「摂食嚥下障害のある子どもと家族への看護」について講演を行った。
５　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１　資格，免許		
看護師免許	昭和63年4月	第616445号（厚生労働省）
小児看護専門看護師（日本看護協会認定）	平成18年11月	日本看護協会専門看護師認定審査を受け、2006年認定された。（第173号）
同上	平成23年11月	日本看護協会専門看護師更新審査を受け、認定された。
同上	平成28年11月	日本看護協会専門看護師更新審査を受け、認定された。
同上	令和3年11月	日本看護協会専門看護師更新審査を受け、認定された。

2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 ＜大学との共同研究＞ 1)茨城県立医療大学プロジェクト研究6「摂食・嚥下障害のリハビリテーション」	平成9年度～平成11年度	茨城県立医療大学と附属病院の共同研究プロジェクトである。サブテーマ「摂食機能障害をもつ子どもへの看護支援のために」のリーダーとして、全国病院・施設調査と看護支援マニュアルを作成した。
2)茨城県立医療大学プロジェクト研究0323「障害のある子どもとその家族に対する専門職者の協力体制に関する研究」	平成15年度～平成16年度	茨城県立医療大学と附属病院の共同研究プロジェクトである。サブテーマ「茨城県版障害児のための専門職者の協力体制モデルの開発」の研究分担者として、取り組み、主に医療機関内の専門職間の連携や家族の考えについてのインタビューに携わった。子どもにかかわる専門職と家族が子どもの課題を話し合うミーティングをモデル事例から実践することを計画していたが、ミーティングへの家族のニーズは高かったものの、専門職の意見は様々であり、実践に至らず、今後の課題に残った。
＜大学の公開講座への協力＞ 1)茨城県立医療大学公開講座「重度な障害をもつ子どもの医療的ケア・看護の工夫」　講師	平成16年10月	大学教員と共同で公開講座を行った。重度な障害をもつ子どもの健康観察とケアに講義およびデモンストレーション等を行った。Q&Aの資料集を作成し、配布した。
4　その他		

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1　ナースのための早引き子どもの看護　与薬・検査・処置ハンドブック	共著	平成21年2月	ナツメ社,平田美佳、染谷奈々子編、全533頁	本書は小児医療の現場で働く初心者からベテランの看護師までの幅広い対象に向けて、検査や処置を受けるさまざまな発達段階にある子どもの看護への戸惑いや疑問解決に役立つことを目的とした。内容はさまざまな発達段階にある子どもの看護に必要なな基礎知識、子どもの生活を中心に考えた与薬・検査・処置時の看護各論、子どもの救急時の看護などである。子どもの身体計測を担当し、各計測の方法と留意点、子どもへの声かけの工夫や配慮について解説した。 担当部分：Ⅱ子どもの生活を中心に考えた与薬・検査・処置時の看護：各論　2身体計測　pp.153-168
2　小児のための看護マネジメント	共著	平成25年12月	中山書店,及川郁子監修,山元恵子責任編集、全260頁	本書は小児看護を専門としている者のみならず、成人の混合病棟で子どものケアに携わる者、新人、学校や地域などで子どもたちをケアする者など幅広い看護職を対象としている。「患児の家族も含めた看護」について、管理者の視点から家族に寄り添える環境、面会、きょうだいへの支援、ファミリールームをどのように考え、提供していったらよいかを解説した。 担当部分：患児の家族も含めた看護 pp.126-133 共著者：及川郁子、山元恵子、渋谷和彦、草場ヒフミ、西海真理、古橋知子、門間智子　他22名

（学術論文） 1 脊髄損傷の学童とその両親のコーピング方略と自己認識－障害適応過程初期にある事例の検討から-（査読付）	共著	平成10年3月	茨城県立医療大学紀要 3　73-84	事故により脊髄損傷を受け重度の障害をもった学童期のAと両親を対象に受傷後2～6か月間の臨床観察、看護記録および質問紙、面接法により多面的にデータ収集した。データからストレス源とその対処方法、障害認識、自己概念・自尊心を調べ、リハビリテーション初期の支援の在り方を検討した。その結果、①Aのストレス源は日課・セルフケアに関する周囲からの圧力、野球ができない、社会化・復学・勉学への不安、太った体型など、②Aの対処は主として情動中心であり、問題中心の対処は両親が代行、③当初障害を一時的と捉えていたが、この入院期間中に徐々に永続的かもしれないと認識しつつある、④障害の影響は特定領域の自己概念には見られなかったが、自尊心には状況的低下の可能性が示唆された。 共著者：前田和子、関和江、旭佐記子、小林八生、野田（門間）智子、長崎多恵子、伊佐地隆 本人担当部分：データ収集を担当
2　小児リハビリテーション病棟における遊びの測定に関する予備的研究　遊び支援評価尺度作成の試み（査読付）	共著	平成10年6月	茨城県立病院医学雑誌 16(1),5-17	遊び支援尺度の作成を目的に,11名の入院児を対象に小児病棟で提供された遊びの実際を把握すると共に,それらを評価しFDCRSの応用可能性について検討した。FDCRSの応用可能性に関しては、 1)選定した5領域28項目が,遊び支援の評価にほぼ応用可能であること、 2)項目6,14,15は発達年齢を考慮して評価基準を検討する必要があること, 3)選定されたFDCRSで評価した後、子供の身体状況に合わせて再検討する必要があること、 4)追加項目として看護診断と遊びとの関連性や他部門との連携のあり方、プレイスタッフの充実,ケア提供者の遊び支援の態度や雰囲気作りの4項目を障害児保育の領域に加える必要があることが明らかになった。 共著者：小林八生、野田（門間）智子、関和江、前田和子、長崎多恵子 本人担当部分：データ収集と分析、執筆の一部を担当
3　リハビリテーション専門病院の小児病棟における救急看護トレーニングの検討（査読付）	共著	平成15年2月	日本看護学会論文集:－小児看護－ 33,127-129.	リハビリテーション専門病院の小児病棟において救急看護に関するトレーニングを実施・評価し,より効果的なプログラムを検討・作成した.トレーニング前後の知識テストの正解率と自己評価が上昇した.シミュレーションの実施後,看護師は救急カートやモニターを意識して確認するようになり,担当の業者にまかせていた点検が看護業務として定着した.プログラムの改善点として,シミュレーションは臨場感を作り出すための準備,シナリオのようなものが必要と考えた.又,勤務との調整のために,実施回数や時間帯も更に検討する必要があった.トレーニングを計画・実施する側が少人数では負担が大きいため,人数を増やす,交代で担当する等の工夫が必要であった。 共著者：野田（門間）智子、小室佳文、種田希、古川由佳子 本人担当部分：研究の総括、研究計画、実施、分析、執筆を担当

4 小児リハビリテーション病棟における看護量に関する予備的研究(査読付)	共著	平成17年2月	日本看護学会論文集：小児看護 35,146-148	小児リハビリテーション病棟における看護量について、8事例を対象に、子ども1名に対して観察者1名がつく参加観察による時間見本法を用いて、事例1名あたり24時間を3日に分割し観察した。その結果、小児リハビリテーション病棟の看護量の特徴と課題が明らかになった。さらに既存の大島分類やWee FIMによる重症度が必ずしも看護量と一致しないことから、独自の看護ケア分類基準表を完成させる必要性が示唆された。 共著者：関和江、前田和子、野田（門間）智子、大槻解子 本人担当部分：データ収集と分析、執筆の一部を担当
5 「重症心身障害児を育てる家族の社会資源活用上の課題と支援のあり方-看護の視点から-」（修士論文）	単著	平成17年3月	茨城県立医療大学	重症心身障害児を育てる家族15名対象に社会資源活用にかかわる経験や考え方をインタビューし、支援のあり方を検討することを目的とした。多くの家族がさまざまな工夫をしながら社会資源を活用していたが、社会資源を活用する上で、子どもの健康に関すること、活用に伴う母親の精神的負担、社会資源へのアクセスやシステム・質などに関する活用上の課題があることも明らかになった。家族が上手に社会資源を活用するために、家族側、社会資源側双方になすべき看護支援のあり方について示唆を得た。
6　重症心身障害児を育てる家族の社会資源活用に関する態度と考え方の推移（査読付）	共著	平成19年1月	日本重症心身障害学会誌31(3),289-295	研究目的は重症児を育てる家族の社会資源に対する態度や考え方の推移を理解し、看護支援に資することであった。対象者は重症児の母親6名であり、データは半構造化面接法により収集した。先行研究のサブカテゴリーを用いて各事例を経時的に図式化し分析した。結果は1)乳幼児期では5例が社会資源活用に消極的であり、理由は障害受容の難しさや濃密な在宅ケアによる余裕のなさ、家族だけで世話すべきとの思いこみであった。2)上記5例中3例が学童期には積極的活用に変化し、そのきっかけは仲間や社会との交流であった。3)推移パターンは『消極的態度から積極的態度へ』、『種類選択的活用姿勢から積極的態度へ』、『消極的態度からやや積極的へ』の3通りあった。分析事例が少ないという限界はあったが、本結果から、看護師は母親の心理状態や生活状態を理解しつつ、長期的視点から母親の社会資源活用能力が向上するような支援を行う必要性が示唆された。 共著者：門間智子、前田和子 本人担当部分：研究の総括、研究計画、データ収集と分析、執筆を担当
7　総合病院における在宅人工換気療法患児のレスパイト入院の実際と問題点（査読付）	共著	平成22年3月	日本看護学会論文集：小児看護 40,90-92	総合病院におけるレスパイトケアの問題点を明らかにするため、在宅人工換気療法を行っている患児2例がA総合病院に入院した際の診療録と看護記録を分析した。また、同院の小児科医師3名と小児科病棟看護師15名にアンケートを行い、レスパイトに対する意見や気持ちを自由記載してもらい分析した。その結果、次のような問題点が抽出された。1)健康問題の重複化が進み、治療や医療的ケアが増えている。2)感染や痙攣による緊急入院が多く、レスパイト間隔を保てない。3)入院に伴う環境変化によりレスパイト中に体調不良を起こしやすい。4)体調不良になり入院期間が長引くと、次のレスパイト患者と重なってしまい業務に支障をきたす。5)レスパイトが増えると、本来のPICUの役割が果たせなくなる危険性がある。6)慢性期にあるレスパイトの看護と急性疾患の看護が混在するのは難しい。 共著者：門間智子、梶山由紀、君崎文代 本人担当部分：研究の総括、研究計画、データ分析、考察、執筆を担当

8 母乳育児が可能となるまで母乳分泌を維持するための支援の効果　母乳育児支援内容の標準化の取り組みに向けて（査読付）	共著	平成24年2月	日本看護学会論文集：小児看護 42,3-5	A病院NICUで2011年2月～3月に母乳育児支援を行った5例の搾乳記録と看護記録を分析し、効果的な支援方法について検討した。結果、乳汁生成I期～II期における早期搾乳の開始と頻回搾乳への支援には「搾乳ダイアリーの活用」「母乳分泌の生理に関する情報提供」「母乳育児カウンセリング」が有効であり、乳汁生成III期からの支援においても同様の支援が有効であると考えられた。 共著者：亀山 千里，門間 智子，小林 美幸 本人担当部分：研究計画・データの解釈・考察への助言・指導
9 直接授乳困難に陥っている低出生体重児を出産した母親の母乳育児に対する気持ち(査読付)	共著	平成25年3月	日本看護学会論文集：小児看護 43,118-121	NICUにおける母乳育児支援の方向性について示唆を得るため、2名の母親(いずれも初産)を対象に半構成的面接を実施した。分析の結果、14サブカテゴリー、「母乳育児をしたい」「直接授乳は自然とできるものではない」「母乳分泌が少ないと母乳育児はうまくゆかない」「周囲が気持ちを受け入れてくれない」「直接授乳困難な状況を打開したい」の五つのカテゴリーが抽出された。当たり前のこととして母乳育児を開始できるよう支援すること、母親が現状を理解できるよう助けること、フォーマル・インフォーマルな支援に関する情報を提供すること、母親の取り組みを受容・支持しながら必要に応じて母親のもつ直接授乳に関する既存の知識を追加・変更してゆくことが必要である。 共著者：亀山 千里，トーマス 京子，門間智子，深澤 千映子 本人担当部分：研究計画・データ分析・考察への助言・指導
10　家族付き添い入院についての小児病棟看護師の認識（査読付）	共著	平成26年3月	日本看護学会論文集：小児看護　44,142-145	小児病棟において家族の付き添いについて看護師がどのような認識でいるのかを明らかにし、子ども・家族・医療者にとって望ましい付き添いのありかたについて検討した。A施設小児科病棟看護師23名のうち、参加を申し出てくれた8名の看護師を対象にインタビューガイドを元に半構造化面接を実施した。逐語録を作成し、まとまりのある文節ごとに分けコード化し、同じようなコードをサブカテゴリーにまとめ、同じようなサブカテゴリーをカテゴリー化し、「付き添いに対する考え」「付き添いの長所」「付き添いの短所」の3項目に分類して考えを抽出した。付き添いに対する考えは「付き添いは必要」など七つのカテゴリーが抽出された。付き添いの長所・短所としては、家族の付き添いは医療者にとって、業務量が軽減できるという長所がある一方、関わりの難しさが短所としてあがった。子どもにとっては安心感などが長所としてあげられ、甘えからセルフケア向上に支障をきたすなどの短所があげられた。 共著者：門間智子、成田美穂、芳賀みつみ、君崎文代 本人担当部分：研究の総括、研究計画、データー収集と分析、執筆を担当

11　先天性心疾患根治術後の幼児の経管栄養離脱に向けた摂食指導1事例の報告(査読付)	共著	令和元年5月	小児看護,42(5),635-639	乳児期をほぼ経管栄養で過ごし、1歳0ヵ月から外来で定期的に摂食指導を行い、経管栄養を離脱した、先天性心疾患(心室中隔欠損症)根治術後の幼児の事例について、乳児期から経管栄養離脱に至までの各期を以下に分け、それぞれのアセスメントを整理し、報告した。1:(1歳0ヵ月)初期評価と助言。2:(1歳1ヵ月～1歳3ヵ月)食環境の改善による変化。3:(1歳4ヵ月)食への興味と水分摂取量の増加を確認し、胃チューブを抜去。4:(1歳5ヵ月～2歳5ヵ月)体調や体重変化を確認しながら経口摂取のみで続けることを支持。5:(2歳6ヵ月)経管栄養不要を確認し外来での支援を終了。乳児期は経管栄養を継続していたが、離脱できない原因をさまざまな側面から査定し、一つずつ解決に努めた。その期間の母親の不安や焦りについても同時に支援したことが経管栄養離脱の一助となった。 共著者：門間智子、渡邉友博 本人担当部分：摂食指導の実施およびデータ収集・分析、執筆を担当
12　茨城県南地域の小児訪問看護の実施状況と課題(査読付)	共著	令和2年3月	常磐看護学研究雑誌,2,21-29	茨城県南地域の小児訪問看護の実施状況と課題を明らかにするために、茨城県訪問看護ステーション協議会県南地域に該当する2ブロック(以下、茨城県南地域)の全訪問看護ステーション(以下、ステーション)55施設を対象に自作の無記名自記式質問紙調査を実施した。茨城県南地域では、35.5%のステーションが小児訪問看護を実施していた。実施していない施設の28.1%は依頼があれば受け入れるとの結果だった。今後も受け入れる予定がないと回答したステーションは34.4%だったが、そのうち50.0%は研修等で小児看護の知識と技術が習得できれば受け入れ可能とのことであった。小児利用者の56.7%が未就学児で、70.3%が医療的ケアを要していた。小児訪問看護を行う上での困難は小児看護の経験がないことによる不安や苦手意識、ケアへのこだわりが強い家族や理解力が乏しい家族へのかかわり、在宅医療体制の不十分さなどであった。今後の課題はより重症度や医療依存度の高い子どもや育児支援、家族へのかかわりなど、ステーションのニーズに沿った研修テーマや研修方法の検討、家族へのかかわりも含めた個別事例に関する相談体制の確立、相談支援専門員も含めた関係職種や関係機関の連携の強化である。 共著者：門間智子、西連寺信枝 本人担当部分：研究の総括、研究計画、データ収集と分析、執筆を担当
13　重症心身障害児の成長過程で段階的に必要となった複数の医療的ケア導入に関する主養育者の意志決定過程　－1事例の分析から－（査読付）	共著	令和4年12月	日本重症心身障害学会誌,47(3),385-393	重症児の成長過程で段階的に必要となった複数の医療的ケア導入に関する主養育者の意志決定過程を明らかにするために、1事例を対象とした事例研究を行い、【よくわからずに言われるがまま受け入れる】、【治療への恐怖から代替手段の提案を受け入れる】、【子どもの変化を実感し、治療を自ら申し出る】、【子どもの変化を実感し、致し方ないと受け入れる】、【必要性がわかっていても葛藤する】、【成長と共に他人事から自分事になる】の6概念を抽出した。 共著者：門間智子、藤岡寛 本人担当部分：研究の総括、研究計画、データ収集と分析、執筆を担当

14　病院看護職員の研究活動への経験や思いにおける世代差と支援の方向性（査読付）	共著	令和5年3月	常磐看護学研究雑誌,5,13-21	病院看護職員の研究の経験や思いから支援のあり方を検討するために、A病院全看護職員を対象に質問紙調査を行った。研究経験あり67%、今後研究をしたい21%であった。「今後研究をしたいと思う」に対し、「研究をしてよかった」「結果を現場に活用できている」が有意に関連していた。年代が低い看護職は「興味がない」「研究したいテーマがない」「やり方がわからない」「時間がない」と考える傾向があり、計画書の書き方や発表の仕方、励ましやねぎらいなどの支援を望み、年代が高い看護職は「研究したいテーマがある」一方「テーマが見つからない」「研究を通して仲間と協力できた」と感じている経口があった。 共著者：門間智子、伊藤智子、金澤ひろみ、豊田江美子 本人担当部分：研究の着想、デザイン、
（その他） 「総説等」				
1　Ⅳ小児における摂食嚥下の技術　看護師のかかわり	単著	平成18年7月	小児看護「小児のリハビリテーション」7月臨時増刊号,加藤令子企画・構成,へるす出版,1092-1095	小児のリハビリテーションの対象となる疾患や障がい、さまざまな症状（障がい）に対する対応を多職種の立場から解説している。担当箇所は摂食嚥下障害のある子どもへの看護師のかかわりであった。摂食嚥下障害についての知識・技術を持つ必要性を述べ、1事例に対する看護の実際について解説した。
2　小児救急外来を受診する子どもと家族の倫理的課題	単著	平成24年7月	小児看護「小児看護と看護倫理」7月臨時増刊号,松岡真里企画・構成,へるす出版,1015-1020	子どもの健康問題から考える看護倫理と看護実践、具体的な場面での看護倫理と看護実践についてまとめている。本稿では、小児救急外来を受診する子どもの家族の倫理的課題およびかかわる医療者が抱えるジレンマと対応について解説した。
3　子どもが親の付き添いのもとで処置を受けることを望んでいるのに医療者の都合で断る場面	共著	平成24年7月	小児看護「小児看護と看護倫理」7月臨時増刊号,松岡真里企画・構成,へるす出版,1075-1078	子どもの健康問題から考える看護倫理と看護実践、具体的な場面での看護倫理ご看護実践についてまとめている。本稿では、設定場面に合う実際の事例を示し、倫理的課題の分析と対応について解説した。 共著者：谷貝玲子,門間智子
4　小児科病棟における人工呼吸療法中の看護	単著	平成24年8月	小児看護「人工呼吸器を装着している小児の看護」8月号,本多有利子,黒田光恵編集,へるす出版,1228-1232	人工呼吸器を装着しているさまざまな状況にある小児の看護についてまとめている。本稿では、小児一般病棟で人工呼吸が必要となった事例の紹介を通して、一般病棟における急変から人工呼吸管理までの看護のポイントを解説した。1事例を紹介しながら、いかに異常を早期に発見し、速やかに人を集めて対応することが重要かを解説した。
5　在宅の場における重症心身障害児・者への看護・ケアの実際	単著	平成26年5月	小児看護「障がい児の痛みと不安のケア」5月号,市原真穂,荒木暁子編集,へるす出版,620-623	障がいのある子どもが、痛みや不安が最小限に関われた環境で過ごせるように、障がいの種類に合わせた支援、障がい児・者が過ごすいろいろな場における支援についてまとめている。本稿では、在宅の場における看護・ケアの実際として、意思表示が難しい重症心身障害者の母親が子どもの痛みや不安をどのように観察し、ケアしているかインタビューし、解説した。

6　小児看護外来	単著	令和元年6月	小児看護「再考！小児看護専門看護師の実践と役割」6月号,長田暁子編集,へるす出版,657-661	活動の場が拡大している小児看護専門看護師の実践と役割について再考してみようという企画のもと、筆者自身が開設した「小児看護外来」を専門看護師としてどのように考え、開設し、継続し、今後の課題をどのようにとらえているかについて記述した。成長発達していく通院中の子どもを生活の視点で支援していくのは看護職であると認識し、開設に至った。医師、その他の職種と連携しながら支援している。今後は外来を存続していくための方法を考えていくことが課題であることを述べた。
7　「なにか変」「いつもと違う」を具体化する	単著	令和2年3月	小児看護「看護師がみる『なにか変』親が感じる『いつもと違う』」3月号,横山奈緒実編集,へるす出版，294-296	テーマについて事例を通して検討し、「なにか変」を具体化する、そのための知識をもつ、家族が知識をもてるよう教育を行うことの重要性を記述した。
8　看護基礎教育における重症心身障がい児の看護	共著	令和3年7月	小児看護「重症心身障がい児（者）のリハビリテーションと看護」7月臨時増刊号，市原真穂・高木典子企画・構成，へるす出版，918-923	看護基礎教育における重症児の看護の位置付けと本学の取り組みを報告した。重症児への看護の学修を通して、小児看護の重要な概念を学修することが可能なこと、重症児を対象とした小児看護学実習を通して、学生たちは看護職としての姿勢も学修していたことがわかった。 共著者：沼口知恵子、門間智子、南雲史代、野口愛、前田和子
「学会発表等」 1　リハビリテーション専門病院の小児病棟における救急看護トレーニングの検討	―	平成14年9月	第33回日本看護学会 - 小児看護 - （富山県）	救急対応の機会が少ないリハビリテーション病院の小児病棟における救急看護トレーニングについて発表した。リハビリテーション専門病院の小児病棟において救急看護に関するトレーニングを実施・実施し,より効果的なプログラムを検討・作成した.トレーニング前後の知識テストの正解率と自己評価が上昇した.シミュレーションの実施後,看護師は救急カートやモニターを意識して確認するようになり,担当の業者にまかせていた点検が看護業務として定着した.プログラムの改善点として,シミュレーションは臨場感を作り出すための準備,シナリオのようなものが必要と考えた.又,勤務との調整のために,実施回数や時間帯も更に検討する必要があった.トレーニングを計画・実施する側が少人数では負担が大きいため,人数を増やす,交代で担当する等の工夫が必要であった。 共同発表者：野田（門間）智子、種田希、小室佳文、古川由佳子
2　小児リハビリテーション病棟における看護量に関する予備的研究	―	平成16年9月	第35回日本看護学会 - 小児看護 - （秋田県）	小児リハビリテーション病棟に入院する特徴的な3ケースにについて、提供されている看護の質と量をタイムスタディを用いて記録し、分析し発表した。事例1名あたり24時間を3日に分割し観察した。その結果、小児リハビリテーション病棟の看護量の特徴と課題が明らかになった。さらに既存の大島分類やWee FIMによる重症度が必ずしも看護量と一致しないことから、独自の看護ケア分類基準表を完成させる必要性が示唆された。 共同発表者：関和江、野田（門間）智子、前田和子

3　重症心身障害児を育てる家族の社会資源活用上の課題と支援のあり方 - 看護の視点から -	―	平成17年7月	日本小児看護学会第15回学術集会 （横浜市）	重症心身障害児を育てる家族15例へのインタビュー結果を質的に分析し、活用上の課題を抽出し、発表した。多くの家族がさまざまな工夫をしながら社会資源を活用していたが、社会資源を活用する上で、子どもの健康に関すること、活用に伴う母親の精神的負担、社会資源へのアクセスやシステム・質などに関する活用上の課題があることも明らかになった。家族が上手に社会資源を活用するために、家族側、社会資源側双方になすべき看護支援のあり方について示唆を得た。 共同発表者：野田（門間）智子、前田和子
4　重症心身障害児を育てる家族の社会資源活用に関する態度と考え方の推移	―	平成17年9月	第31回日本重症心身障害学会学術集会 （東京都）	重症心身障害児を育てる家族5名へのインタビューから社会資源活用に関する態度と考え方が経時的にどのように推移していったかを分析し、その結果と支援のあり方を発表した。結果は1)乳幼児期では5例が社会資源活用に消極的であり、理由は障害受容の難しさや濃密な在宅ケアによる余裕のなさ、家族だけで世話すべきとの思いこみであった。2)上記5例中3例が学童期には積極的活用に変化し、そのきっかけは仲間や社会との交流であった。3)推移パターンは『消極的態度から積極的態度へ』、『種類選択的活用姿勢から積極的態度へ』、『消極的態度からやや積極的へ』の3通りあった。分析事例が少ないという限界はあったが、本結果から、看護師は母親の心理状態や生活状態を理解しつつ、長期的視点から母親の社会資源活用能力が向上するような支援を行う必要性が示唆された。 共同発表者：野田（門間）智子、前田和子
5　人工呼吸器を装着している子どもの入浴方法の工夫	―	平成18年7月	日本小児看護学会第16回学術集会 （神奈川県横浜市）	人工呼吸器を装着し、体も大きく、浴槽へ移動して入浴することが難しい子どもをベッド上で安全に入浴するための方法を検討し、入浴中のバイタルサイン観察も含め、安全に実施でき、再現性を確認できたので、その方法と実際を報告した。 共同発表者：門間智子、梶山由紀
6　付き添い入院をしている家族から見た看護ケアの現状と期待	―	平成18年7月	日本小児看護学会第16回学術集会 （神奈川県横浜市）	小児看護の構成要素をもとに作成したアンケートを家族に行い、付き添い入院をしている家族から見て看護ケアをどのようにとらえており、どんなことを期待しているかを発表した。 共同発表者：大山久美子、梶山由紀、門間智子、菅谷周子
7　ターミナル期における家族へのかかわり	―	平成18年9月	第37回日本看護学会ー小児看護ー （神奈川県横浜市）	悪性疾患によりターミナル期になった子どもと医療不信のある家族への看護について、子どもへの看護を家族と話し合いながらしっかり行うことで、家族との信頼関係ができ、最期まで家族の意思を尊重し、医療を行った事例を振り返り、発表した。 共同発表者：信戸昭美、門間智子、若林陽子、菅谷周子
8　突然低酸素脳症となった事例に対する摂食嚥下障害看護を振り返って	―	平成18年11月	茨城県総合リハビリテーションケア学会 （茨城県水戸市）	低酸素脳症となった事例の急性期の摂食嚥下障害をどのようにアセスメントし、看護を行っていったかを振り返り、発表した。急性期で病状が変化しやすい中で行っておくべきこと、家族への支援も含め、報告した。

9　入院に付き添っている家族と看護師のケア分担に関する認識（第1報）ー両者への質問紙調査からー	ー	平成19年9月	第38回日本看護学会 - 小児看護 - （茨城県つくば市）	小児看護の構成要素をもとに作成したアンケートを家族、看護師双方に行い、付き添い入院をしている家族から見て看護師に期待するケアにはどんなものがあるか、家族が付き添っている小児へのケアを看護師はどのようにとらえているかを比較し、発表した。 共同発表者：釈本良子、梶山由紀、門間智子、君崎文代
10　入院に付き添っている家族と看護師のケア分担に関する認識（第2報）ー看護師へのフォーカスグループインタビューからー	ー	平成19年9月	第38回日本看護学会 - 小児看護 - （茨城県つくば市）	入院に付き添っている家族と看護師でケア、特に日常生活の援助をどのように行っていったらよいと考えているかを看護師へのフォーカスグループインタビューからまとめ、発表した。 共同発表者：梶山由紀、門間智子、釈本良子、君崎文代
11　採血時のプレパレーションー保育士の立場からー	ー	平成19年10月	第56回日本農村医学会学術総会 （新潟県）	採血について、紙芝居での説明、ぬいぐるみへの採血ごっこなどのプレパレーションを行うことで、子どもが主体的に採血に臨めるようになるかを観察し、病棟保育士の視点でまとめて発表した。 共同発表者：川田志保、門間智子、梶山由紀、長谷川幸子、君崎文代
12　総合病院におけるレスパイトケア入院の実際と問題点	ー	平成21年9月	第40回日本看護学会 - 小児看護 - （高知県）	総合病院におけるレスパイトケアの問題点を明らかにするため、在宅人工換気療法を行っている患児2例がA総合病院に入院した際の診療録と看護記録を分析した。また、同院の小児科医師3名と小児科病棟看護師15名にアンケートを行い、レスパイトに対する意見や気持ちを自由記載してもらい分析した。その結果、次のような問題点が抽出された。1)健康問題の重複化が進み、治療や医療的ケアが増えている。2)感染や痙攣による緊急入院が多く、レスパイト間隔を保てない。3)入院に伴う環境変化によりレスパイト中に体調不良を起こしやすい。4)体調不良になり入院期間が長引くと、次のレスパイト患者と重なってしまい業務に支障をきたす。5)レスパイトが増えると、本来のPICUの役割が果たせなくなる危険性がある。6)慢性期にあるレスパイトの看護と急性疾患の看護が混在するのは難しい。 共同発表者：梶山由紀、門間智子、君崎文代
13　小児摂食・嚥下ケアチームの活動報告-立ち上げから1年を振り返って -	ー	平成22年7月	第60回日本病院学会 （岐阜県）	三次救急を扱う総合病院において、軽視されがちな小児摂食嚥下障害について、チームを立ち上げる目的、チーム発足までの準備、活動内容、今後の展望などを報告した。 共同発表者：門間智子、渡辺章充、中安健
14　小児にかかわる職員の摂食・嚥下リハビリテーションについての関心や知識の調査	ー	平成22年9月	第16回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会 （新潟県）	摂食嚥下障害については、看護基礎教育においてそれほど重視されておらず、臨床に出てからの自己研鑽に任されている。摂食嚥下障害児が通院・入院する急性期病院において、かかわる職員がどの程度の知識や関心を持っているかを調べ、職員をどうサポートしたらよいかを検討するための材料を得たので報告した。ここでいう「かかわる職員」とは看護師、医師、療法士である。 共同発表者：門間智子、渡辺章充、中安健

15　専門看護師・認定看護師の会が行う「認定看護師を目指す人への支援」の検討 - 看護職への調査から -	―	平成23年7月	第61回日本病院学会 （東京都）	院内の専門看護師・認定看護師の会として、これから認定看護師を目指す看護師をどのように支援したらよいかの示唆を得るためにアンケートを行った。結果、目指している看護師が一定数いることが確認できたが、それを阻む要因も確認できたので、会としての支援のあり方を検討し、発表した。 共同発表者：門間智子、平山薫、大槻勝明
16　卒後6年目以上の看護師を対象とした部署別事例検討研修の実際と評価 - 倫理的ジレンマ事例への対応を目指して -	―	平成23年8月	日本看護倫理学会第4回年次大会 （岩手県）	卒後6年目以上の看護師の倫理研修として、所属する部署に生じている倫理的課題が何かを抽出してもらい、その部署で倫理カンファレンスを行ってもらった。その際、各看護倫理委員が担当部署をもち、ファシリテーターとしての役割を果たした。その研修の実際を報告した。 共同発表者：門間智子、松本俊子、疋田富美江
17　小児の訪問看護を行う訪問看護師が抱える課題 - 訪問看護師たちへのフォーカスグループインタビューから -	―	平成23年12月	平成23年度茨城県看護研究学会 （茨城県水戸市）	小児の訪問看護を行っている訪問看護師に対してフォーカスグループインタビューを行い、抱えている課題を明らかにし、発表した。母親がケアを習得しているので自分の役割が見いだせない、自分自身が訪問看護を要するような小児の看護経験がなく自信をもてないなどが抽出された。 共同発表者：西連寺信枝、門間智子
18　救急外来での子どもの採血場面における倫理的課題についての医療者の経験と考え	―	平成24年6月	第26回日本小児救急医学会 （東京都）	救急外来で小児を担当する医師、看護師にアンケート調査を行った。採血に対しては子どもや親の意思を尊重したいと思う一方で、救急場面という状況から医療者主導になってしまうことに葛藤を感じている者もいた。 共同発表者：門間智子、谷貝玲子、井川洋子
19　小児在宅療養を支援するための取り組み - 小児看護専門看護師の立場から -	―	平成25年3月	第72回茨城県農村医学会 （茨城県つくば市）	重度の障害や医療的ケアを要する小児が増えている。彼らとその家族の在宅療養がうまくいくためには、多職種の連携が重要となる。地域との連携だけでなく、院内各部署の連携が基本であり、組織横断的に活動する小児看護専門看護師の立場から、院内各部署の連携強化から始めた取り組みの実際について発表した。
20　家族付き添い入院についての小児病棟看護師の認識	―	平成26年9月	第44回日本看護学会 - 小児看護 - （栃木県）	小児病棟において家族の付き添いについて看護師がどのような認識でいるのかを明らかにし、子ども・家族・医療者にとって望ましい付き添いのありかたについて検討し発表した。A施設小児科病棟看護師8名にインタビューガイドを元に半構造化面接を実施した。逐語録からカテゴリーを生成し、「付き添いに対する考え」「付き添いの長所」「付き添いの短所」の3項目に分類して考えを抽出した。付き添いに対する考えは「付き添いは必要」など７カテゴリーが抽出された。付き添いの長所・短所としては、家族の付き添いは医療者にとって、業務量が軽減できるという長所がある一方、関わりの難しさが短所としてあがった。子どもにとっては安心感などが長所としてあげられ、甘えからセルフケア向上に支障をきたすなどの短所があげられた。 共同発表者：門間智子、成田美穂、大関和恵、君崎文代

21　研究活動における病院看護職の経験・思い	―	平成27年8月	第46回日本看護学会 - 看護教育 - 学術集会（奈良県）	研究活動に対して病院看護職員（約600名）はどのような経験をし、どのように考えているかアンケート調査を行い、分析した。研究結果を臨床に活かせていると感じている者のほうが今後も研究をしてみたいと思っている傾向が明らかとなり、研究支援への示唆を得た。 共同発表者：門間智子、伊藤智子、金澤ひろみ、豊田江美子
22　在宅療養中の重症心身障害児（者）を育てる家族の養育負担感と関連因子	―	平成27年9月	第41回日本重症心身障害学会学術集会（東京都）	在宅療養をしている重症心身障害児の親30名を対象に養育負担尺度を含めたアンケート調査を行い、重症度スコアとの関連をみた。養育負担感と重症度には必ずしも関連はなく、養育負担に関連する要因は他にある可能性が示唆された。 共同発表者：門間智子、渡辺章充、小林朱美
23　病院看護職の研究活動への思い・考えにおける世代差	―	平成28年2月	平成27年度茨城県看護研究学会（茨城県水戸市）	研究活動に対して病院看護職員（約600名）はどのような経験をし、どのように考えているかアンケート調査を行い、世代差を分析した。若手看護師は研究活動に負担感を持っており、年長看護師は研究への責任を感じ、取り組みたい傾向にあることがわかり、院内研究に関する研修プログラムへの示唆を得た。 共同発表者：門間智子、伊藤智子、金澤ひろみ、豊田江美子
24.総合病院における重症心身障害児・者ケアコンサルテーションチームの結成	―	平成29年6月	第42回日本CNS看護学会（東京都）	重症心身障害児・者（以下、重症児・者）の小児科から成人内科系への移行支援が検討されているが、円滑に進まない現状がある。総合病院には他院小児科に通院している重症児・者が症状に合わせて小児科以外の診療科を受診、入院することがある。この時、重症児・者に日常的にかかわっていない医療者が気軽に相談できるようなシステムを作り、重症児・者とその家族も安心して診療を受けられるよう、コンサルテーションチームを結成した。その報告をした。 共同発表者：門間智子,渡辺章充
25.先天性心疾患児の経管栄養離脱に向けた摂食指導の実際	―	平成29年7月	第44回関東農村医学会学術集会（茨城県つくば市）	乳児期をほぼ経管栄養で過ごし、1歳0ヵ月から外来で定期的に摂食指導を行い、経管栄養を離脱した、先天性心疾患(心室中隔欠損症)根治術後の幼児の事例について、乳児期から経管栄養離脱に至までの各期を以下に分け、それぞれのアセスメントを整理し、報告した。1:(1歳0ヵ月)初期評価と助言。2:(1歳1ヵ月～1歳3ヵ月)食環境の改善による変化。3:(1歳4ヵ月)食への興味と水分摂取量の増加を確認し、胃チューブを抜去。4:(1歳5ヵ月～2歳5ヵ月)体調や体重変化を確認しながら経口摂取のみで続けることを支持。5:(2歳6ヵ月)経管栄養不要を確認し外来での支援を終了。乳児期は経管栄養を継続していたが、離脱できない原因をさまざまな側面から査定し、一つずつ解決に努めた。その期間の母親の不安や焦りについても同時に支援したことが経管栄養離脱の一助となった。 共同発表者：門間智子,渡邊友博
26. 中途障害の幼児を育てる母親の思いの変化-低酸素脳症1事例へのインタビューから-	―	平成29年8月	日本小児看護学会第27回学術集会（京都府）	中途障害の幼児を育てる母親1名にインタビューを行い、質的に分析した。母親には衝撃、動揺、喜び、葛藤などの感情が混在しており、様々な要因によって絶えず変化していた。障害を肯定する気持ちと否定する気持ちの両方の感情が常に存在することが示唆された。 共同発表者：青山洸太,門間智子,瀧田玲子,金澤ひろみ

27. A県B地域における小児訪問看護の実態と課題	ー	平成30年2月	平成29年度茨城県看護研究学会（茨城県水戸市）	A県B地域の小児訪問看護の実施状況と課題を明らかにするために、A県訪問看護ステーション協議会県南地域に該当する2ブロック(以下、B地域)の全訪問看護ステーション(以下、ステーション)55施設を対象に自作の無記名自記式質問紙調査を実施した。B地域では、35.5%のステーションが小児訪問看護を実施していた。実施していない施設の28.1%は依頼があれば受け入れるとの結果だった。今後も受け入れる予定がないと回答したステーションは34.4%だったが、そのうち50.0%は研修等で小児看護の知識と技術が習得できれば受け入れ可能とのことであった。小児利用者の56.7%が未就学児で、70.3%が医療的ケアを要していた。小児訪問看護を行う上での困難は小児看護の経験がないことによる不安や苦手意識、ケアへのこだわりが強い家族や理解力が乏しい家族へのかかわり、在宅医療体制の不十分さなどであった。今後の課題はより重症度や医療依存度の高い子どもや育児支援、家族へのかかわりなど、ステーションのニーズに沿った研修テーマや研修方法の検討、家族へのかかわりも含めた個別事例に関する相談体制の確立、相談支援専門員も含めた関係職種や関係機関の連携の強化である。 共同発表者；西連寺信枝，門間智子
28. 小児救急外来受診者の実態から考える家族への支援	ー	平成30年6月	第32回日本小児救急医学会（茨城県つくば市）	A院ERの1か月間の0～15歳の受診者全例の重症度、主訴などを分析し、支援を検討した。重症度は１次95%、２次4%、3次1%であり、症状別では多い順に発熱、不慮の事故、呼吸器症状であった。ERだけでなく、地域と連携して家族教育をする必要性が示唆された。 共同発表者：門間智子、瀧田玲子、井川洋子
29.急性期病院の小児看護外来を受診した摂食嚥下障害児への支援の実際	ー	令和Ｉ年9月	第25回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術集会（新潟市）	A院小児看護外来で行った摂食指導から対象となった摂食嚥下障害児の特徴と支援の実際を整理し、報告した。 共同発表者：門間智子、渡辺章充
30. Cornelia de Lange症候群の子どもが経管栄養を離脱するまでの支援1事例の報告	ー	令和3年8月	第26・27回合同学術大会　日本摂食嚥下リハビリテーション学会（ハイブリッド開催）	経口哺乳が困難であったCornelia de Lange症候群の子どもへの哺乳、摂食指導を通し、経管栄養離脱に至るまでの支援を考察し、報告した。 共同発表者：門間智子、白井謙太朗、渡辺章充